

まえがき

マニキュアリストになりたいと思ったきっかけ。一言で言えば、「ネイルアートした自分の爪を眺めると、気持ちが悪くハッピーになれた」から。「えっ!? それだけ?」と思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、実に単純なものです。正直、「ネイルアート」でなくても、喜んでもらえるものならなんでもよかったのだと思います。

子どもの頃の私は、「自分の生きている意味」を模索していました。「なんのために生まれたの?」「私はこの世の中で必要なの?」思春期はそんな疑問を抱え、答えは一向に見つかりません。

こんな子どもでしたから、性格は内気で、これといった取り柄もなく、自信のなさが手伝って引つ込み思案。頭の中は「どうせ、私なんかできっこない……」のマイナス思考。やりもしないうちから、あきらめることが多かった子ども時代でした。

そんな私が、「やりたいことを仕事にする」ことができた。そう、夢を叶え、マニキュアリストになつてしまった! 当時の自分には、考えもしなかったことです。では、内気な少女に、何が起こって「行動できる」ようになったのでしょうか? これも実に単純です。

ネイル！ 楽しい！ 大好き！

その『プラスのパワー』が、自分の想像を超え、行動させただけ。そこに、損得なんてありませんでした。「好きこそものの上手なれ！」とは、よく言ったものです。『○○ができるようになりたい！』という感情』は、たとえ簡単に事が運ばなくても、あきらめることを許しませんでした。今思えば、過去の自分は「自分の目で見えてきた少ない経験」でしか、物事を判断できなかつただけでした。

話は変わりますが、ここ数年で急激にネイルサロンが増え、『きれいな人がより美しくなる場所』というイメージで、ネイル産業は成長したように思います。運よく私もその波に乗ることができました。もちろん、ネイル技術の発展は素晴らしい、多くの女性の心を虜にしています。そんな中、深爪を気にしていた乙女たちは、よりコンプレックスを抱くようになってしまいました。

例えば日常生活では、

- ・ こんな爪、見せるのも嫌（爪を見せて、変なふうに見えるのが嫌）
- ・ レジでの支払い時に、指先を隠している（爪を見られるのが恥ずかしい）
- ・ この爪を異性に知られるのが、恥ずかしい……

サロンでは、

- ・ サロンに行っても、「あなたの爪では無理です」と言われ傷ついた（だから予約する前に電話で「爪短いけどできますか？」と聞いたのに……）
- ・ 深爪の私には、ネイルサロンは無縁（爪のきれいな人が行くところですよ）
- ・ 爪が短すぎるから、ネイルしてもすぐに取れちゃう！ 格好悪い！ アートだつて描ける爪がない！

本当は、オシャレしたいのに、

- ・ この爪で、オシャレしたつて似合わない
- ・ 指輪は、小さい爪が目立つからつけたくない
- ・ 結婚式で、指輪の写真（手のアップ）を絶対撮られたくない

要するに、

- ・ 自信がなくて（行動できない）……など

本来、ネイル技術というものは、ケア（お手入れ）のことを指しています。ケアがあつてこそアートも引き立ちます。

私が考える「ネイル技術」というものは、手先のコンディションをよくするために始まったものです。特にネイル技術の中の、スカルプチュア（爪を伸ばす技術）に至っては、短い爪をどうにかしたくて、人工的に伸ばしてみたのが始まりだと聞いています。

私は、爪というパーツを通して、色々な方と会話をしてきました。とりとめのない会話や、ときには経験談を伝えたり、逆にお客様から勇気を頂いたり。振り返ってみれば、サロン業務でお客様から教わったことは数知れず。ただ、ネイル技術を提供していただけではなかった、ということに気づかされました。

さらに思っていたよりも多くの乙女たちが、爪への悩みを抱えている。それに関連してまた別の悩みも抱えている。そのことが引き金となって自分の行動に自信が持てないでいる。私から見れば、とても魅力的な女性なのに、なぜか自己評価が低い人がいる。かつての自分も自信がなかったように。深爪が原因で今一步勇氣を持ってない乙女たちへ。少しでも彼女たちの心に光が差し込んでくれますように……。

この本の中では、あえて「乙女」という言葉も使っています。それは、今まで私のサロンのラブオアシスで「深爪補正」をされ、克服されていかれた方は皆、優しく、純真で、控えめ、心の美しいピュアな気持ちを持った女性ばかりでしたので、そう呼ばせていただきました。